



ひびき

◆ゆたかなかわりを求めて
夢や希望をもち
未来をひらく子ども

3学期始業式の講話より ～命について考える～

校長 渡邊 芳久

新年初日の大地震の発生。そして、次々と明らかになってくる甚大な被害……。はじめに、この度の大震災でお亡くなりになった方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被害を受けられた皆様へ心よりお見舞い申し上げます。

そのような状況の中で迎えた、1月9日の第3学期始業式。この度の大震災による各ご家庭の状況は子どもたち一人一人によって異なり、揺れ動いた心のその振れ幅や方向性もおそらくそれぞれに違っている中、どのような話をしたらよいのかと悩みました。

そして、悩んだ結果、「命」について話すことにしました。それは、今回の大震災では、私自身が昔からの友人の安否を確認できない数日を過ごし、「何とか無事でいてほしい」と願い続けるとともに、「もし自分だったら・・・自分の家族だったら・・・」「命って何なのだろう」などと心が大きく揺れ動いたからです。

始業式では、子どもたちには右のスライドを使って、105歳でお亡くなりになるまで東京の聖路加国際病院の院長、名誉院長をされた日野原重明さんのお考えを伝えました。



ご存じの方も多いと思いますが、日野原さんは、95歳の頃に「十歳のきみへ」という本を出版し、また、実際に子どもたちの所に出向き、「いのちの授業」をし続けました。それらの中で、子どもたちに問いかけます。「あなたの命はどこにありますか?」、胸に手を当てる子がいると「そうだね。そこには心臓があるね。心臓は体中に血液を送る大事な臓器だけれども、心臓はいのちではないんだよ。」「いのちは、きみのもっている時間のことです。いのちは見えないし、さわれないし、感じられません。大事なものは目には見えないんだよ。」そして、子どもたちに「時間は見える?」と問い、「昨日も今日も見えないけれど、寝たり、勉強したり、遊んだりするのは、きみたちのもっている時間を使っているんだよ。時間を使っていることが、きみが生きている証拠。時間の中にいのちがあるんだよ。」と説いた方です。さらには、「きみたちのもっている時間をどのように使うかしっかりと考えてほしい。そして、その時間を、自分のためだけではなく、他の何かのために使うことを学んでほしい。」とも語りかけています。

そのような内容の話をした後、「自分の命、時間を大事にしてほしい。大切にしてほしい。」と伝え、命についての話を終わりにしました。

私事で恐縮ですが、私の友人の安否については、地震発生から3日目の早朝5時過ぎに無事と分かり、5日目にはLineでの連絡が取れるようになりました。ありがとうございます。